
会長は・・・

レオ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会長は・・・

【著者名】

レオ

【あらすじ】

凜架学園、生徒会会長、美原鈴羽。

会長の田つきに生徒たちは引いてしまつほどのか
クールな田つきの会長。

ある日、放課後サッカー部員で癒しをもらつていると・・・?!

* 第1話 *

れいかがくえん
鈴架学園 · 生徒会会長 · 美原鈴羽

ただいま、校舎見回り中。

「……そり、走らない？」

今急して
ひしゃく

「日暮にさかの」

二十回ぐらゐ唱えてゐる間に相手は強歩で

周りの人もささあー・・・と引いていく。

ガタンツ

あたしは生徒会室のドアを勢いよくあけた。

はあ ながたのみがでいかず

席に座つて書類の整理などをしていく。

今日も書類は山積みて
余裕で放課後までかかってしまった……

6時間目が終りかかる、現在までふつ通しで書類作業中。

さすがに首と田と手が死んできた。・・・。

卷之三

書類作業を進めてる途中、ふと校庭から聞こえる声に耳を傾ける。

「るあ！・バス！」

『二月の夜』

『させるかあああー』

サッカー部の声だ。よく声が通つていて
惚れ惚れするな・・・

あたしは少し休憩と自分に言い聞かせ、窓からサッカー部を観た。
赤Tと青Tで分かれて試合してるらしい。

ここはサッカー部、チームワークがよくて県大会でも
何度も優勝している、つわものチームだ。

「はあ・・・癒されるわ・・・」

サッカー部員たちをみながら窓際に頬杖をつく。
パアッと簡単に部員たちを見ると、一人だけベンチに座つて見て
いる人がいた。

「ちょ・・・やばい・・・イケメンだ・・・！」

あたしはうつとりとその男子を眺める。背、高いなあ・・・
何で試合出でないんだ？ 怪我してる？

そんなこんなで、5分ぐらいたつて

あたしは我にかえる。

「書類作業作業・・・・・」などに限つて何してんだ・・・

また席に戻つて作業を始める。

・・・が、どうしてもさつきのイケメンをまた見たくなつてしまつ
た。

どうしようもない、この見たい感にあたしは負けた。

あたし以外は知らないけど、あたしはイケメン大好きなのだ。

だから、作業の合間合間にサッカー部員で癒されている。（毎日）

もう一度窓から覗くと、不意にベンチに座つてる男子と田が合ひ
あわあわと窓から首を引っ込めた。

・・・あぶなかつたあ・・・

もう少しで秒殺ところだつた・・・

次はしっかり気合いを入れて作業に取り掛けようとしたときだつた。

コンコンッ

あたしはノックで自分をいつも美原会長に戻した。

「はいって。」

「失礼しまーす」

がらつと入ってきたのは・・・

背の高いイケメン・・・そ、さつき言つてイケメンだ。
な、なんでここに・・・?!

「えつと・・・用件はなに?」

いつものあたしで精一杯答える。
でも顔はいまだにほつてつてる。

み、みてたつてばれてない!?!?

あたしはあたふたしていた。

そして、次のイケメンの言葉に

あたしは思い切り赤面してしまった。

「俺の事ずーっと見てたでしょ?かいちょーさん?」

ぶわあつと頬が熱くなるにつれて

あたしの鼓動はとても早くなっていた。

* 第2話 *

「な、なんの」と?「

とりあえず否定してみる。

けど、多分いや絶対に無意味だ・・・

「否定権無しだろ? さつき俺とめえあつたときあわあわと顔引っ込めたくせして」

「うつ・・・やっぱり見てた・・・?」「さすがに恥ずかしい。

あたしがイケメン好きってばれたんだよね・・・

「まあ、かいちょーがイケメン好きってのはだーいぶ前から知つてたけどね」「は!?

さすがのあたしも声を張つてしまつた。

「なんで知つてんの!?

「1年のときからずーっとサッカー部員みてただろ?」「

「・・・ハイ」

やられた。

ばれてたなんて思いもしなかつた。

あれ・・・1年から知つてるつて・・・?

「も、もしかして先輩?!

「ビンゴー」

ま・・・まさか・・・先輩だつたとは・・・

「す、すみません・・・」

「なにが?」「

「いや・・・なにがつてかどこまでも・・・

「別に俺はいいんだけど。てか、俺の事今まで知らなかつたわけ?」

「ええ、まつたく存じて居りません・・・」

「珍しいな？俺、鈴架学園ノートにもてるんだけどな」

「あー・・・すみません、そっち系まつたく興味ないんですね」

「イケメン好き、なのに？」

「うつ・・・ええつとですね・・・あたし」・の・みーのイケメン

好き、なんで・・・」

「じゃあ、俺は会長好みと？」

「Y e s ・・・」

「くつ・・・会長つて意外と面白いな？」

「さあ・・・そなんでしょうかね・・・。田つわ懲いのに

変わりはないんですけどね・・・」

「そうか？あ、わかつた髪の毛だ」

そういうと先輩はあたしを引き寄せて
くるつと反転させて、髪の毛を上げた。

「や、ちょ、せんぱい！？」

ぱちんっと音がなる。

な、何の音！？

「ほら、くくつたら全然かわいいじゃん」

またくるつと反転させて

ドアで反射したあたしを見せた。

いつも髪の毛をたらしつぱなしのあたしは
自分が髪の毛を上げている状態に
違和感を感じた。

「どうよ？」

「・・・なんか変な感じですね」

「こつもたらしつぱなしだからだね」

「まあ・・・そなんですけどね・・・」

そこからは完璧に沈黙が続いた。

あたしはふと、思つたことを質問した。

「あの・・・先輩、なんでサッカー出でないんですか・・・？」

「まだ引退ははやいんじや・・・？」

「ああ、俺、脚怪我してんだよ」

「へ!? 大丈夫なんですか?!」

「まあ、ちょっとした打撲だから。大丈夫」

「なら、いいんですけど・・・」

やつぱり心配だった。

あたしの心の気づいたのか先輩は
あたしの頭を撫せて

「大丈夫心配しないで」

さすがにちょっと恥ずかしくて「書、書類作業に戻ります、お大事
に・・・」

といつて席に戻った。

「あ、俺ちょっと見といていい?」

「へ?!え、あ・・・はい」

あたしはなぜこんなに不自然な返事をしているのだろうか。
とりあえず書類作業を進めていく。

目の前で見学している先輩がものすごく気になるけど・・・

「サッカー・・・戻らなくともいいんですか?」

「別にいいんだよ、どーせでないし」

「そう・・・ですか」

・・・戻つてほしいうような戻つてほしくないような・・・

面倒くさいこの気持ち

・・・いつたいなんなわけ?

* 第3話 *

「そーいえば俺かいちょーの名前しらないな」「へ?！」
さつきまで沈黙だつたのに
いきなり先輩がしゃべつたものだから
びっくりしてしまつた。
「え? そこまで驚く?」
「あ、いや仕事に入り込んでたんで・・・」「ほんと、かいちょーは眞面目だね。もう少し気楽に生きないと世の中たえられないですよ」「それは無理です。くそ眞面目に生きないと世の中たえられないですよ」
「ま、いつか絶対苦しくなると思つたけど。そのときは俺を頼りな」「な、なんでそうなるんですか!」「だつて俺の事好きなんだろ?」「・・・顔が、ですよ」
何の会話だ・・・これ
どうでもいい話をあたしはペラペラと・・・
「ふうん・・・で、かいちょーさんのお名前は? クラスも言つてくれ」「あ・・・美原鈴羽です。2-Aです」「俺は久仁^{くにえだ}江田哉也、3-B。あらためてようじへ」「コリと笑う先輩に思わず見とれる。
・・・かつこいい・・・
「そんな眼見されても困るよー・・・?」「!!--す、すみません!」「いや、別にいいけどね。てか、かいちょーっていつも6時回るよ。まあ、まだ外明るいけどさ」「6時ですか・・・まだまだ帰れそうにないですね」

「え、何時にかえんの？」

「8時ぐらいですよ」

「えー？ 学校に許可得てるの？」

「はい、なので堂々と8時までやつてますよ」

「でも8時つて結構暗いんじゃ？」

「・・・大丈夫、です。どうせ一人なので。」

そう、どうせ一人。

家には誰もいない。

父も母も兄弟も。

「ご家族心配す・・・」

「先輩、サッカー、試合終わつたみたいですよ、行つて下さー」

あたしは先輩の言葉をさえぎる

「俺別に・・・」

「良いから行つて下れー。部活のサボリは許しません。

ほらー早く行つてー！」

あたしは先輩を無理やり廊下に追い出し

ドアを閉めた。

「・・・ご家族なんていませんよ・・・先輩

だつて、あたしの家族・・・

「殺されたんですから・・・」

さすがにやばい。

涙があふれる。

このじるその話に触れていなかつた分だ。

あたしはペタリと床に座つて泣きじやくつた。

すると、ドアがあいた。

あたしは気にならないままだつたけど
不意に後ろから抱きしめられてびっくりした。

「先輩・・・？」

「『めん、俺のせい。まじで』『めん』

「いいんです……慣れてるので……はやく部活行ってください」

「でも……」

あたしは先輩から離れて、先輩に笑いかけた。

「過去は過去ですから、ね。うん、そうです。いつていりっしゃい」

先輩は「わかった」といつて、生徒会室を出て行った。

あたしはまた、席に着き書類作業に戻った。

「集中、集中……」

とにかく集中した。

・・・悲しい過去を見えなくするにはこれしかないので。

「後、イケメンを見る……」

自分でも怖いほど最近

イケメンが大好きになってしまった。

「先輩なんてど真ん中ストライクですよ……」

窓を見てなんとなくつぶやいた。

* 第4話 *

「 もうすぐ8時回ぬけど、いいの？」

不意に窓のところから声が聞こえて

あたしは一部の書類を落としてしまった。

「 へ？！ うわつヤバイ！」

急いでかき集めて拾いあげる。

そして窓のほうを見ると

案の定、先輩がいた。

「 お、おつかれさまです」

「 お疲れ様、後どのぐらい？」

「 あ・・・えと、あとこここの書類だけです」

「 そつか、じゃあ俺待ってるわ」

「 い、いや！ いいです、帰つてください！」

「 それは個人の自由だろ。」

「 でも変える方向別々だと思いますよ？」

「 大丈夫、今日俺かいちょーの家とまるから」

「 にや？！ ？！ ？！ ？！ ？！ ？！ ？！ ？」

先輩の突拍子もない一言に

あたしは思わず変に声をだしてしまった。

思いつきり裏返つてるその声にか

先輩はクツクツと笑つている。

「 そんなに驚くか？」

「 ああああ、あたりまえでしょーーーーー！」

「 社会人になればこんなこと田常茶判事だよ？」

「 まだ高校生ですーーー！」

「 まあまあ、そんなに取り乱すなつて。」

「 て、てかーなんであたしに構うんですか！」

普通、きもちわるいでしょ? 一年からずっとサッカー部員を田の保養にしてるなんて・・・

最後はす”く小声になってしまった。

いやでも、恥ずかしいものだ・・・

「別に?俺知つてた身だし。最初はこいつなんだ?って思つてたけど、

徐々に違和感もなくなってきたし、今となつては、今日も見てくれる?と

思つてサッカーがんばれるし?ま、そのせいで怪我したんだけどなあたしの口からしつかりとした声は出ず

「あ、わわわ!?’とか言つ意味不明な言葉しか出なかつた。

「それと、さつきの話。俺そういうのまじでほつとけないから」

いきなり真剣な顔になつた先輩に
あたしは思わずまた書類を落としてしまつた。

「わわつす、すみません!」

「いいよ、俺拾うから」

書類を集めて、にっこり笑つて「はい」と渡してもらつたときにはあたしの頭の中はパンク状態・・・。

「とにかく、その書類作業終わらせなよ」

「あ、は、はいー」ほひーほひー

息づいていった言葉の語尾にあたしはむせた。

「ふわああ・・・やつと終わつた・・・」

ケータイを開くと、すでに8:30を回っていた。

学校から何も言われるのはあたしの権力つて感じかな。

「あれ・・・先輩?」

どこにも見当たらぬと思い、先輩と呼ぶと後ろから「終わつた?」と声が聞こえた。

「うわつ先輩、いつのまに後ろに?!

「だーいぶまえにきたんだけど?」

「あ・・・すみません、まったく気づいてませんでした。

「くつ！すごい集中力だな？さすが学年トップの成績だ」

「何で知ってるの！？」

「そこに張つてあつたから。」

「あ・・・」

「ほら、はやく書類片づけてかえりうよ」

「そ、そですね」

あたしはなにを動搖してるのだろうか？

小さいころから友達は男ばかりで

そこからイケメン大好きが発生したものの
男子に緊張することなんてなかつたのに・・・

「ん？ どうした？」

「いえ・・・なにも」

この動搖は・・・なに？

* 第5話 *

「それじゃあ、この書類、職員室に届けてくるので待つてください。

あ・・・いや先に帰つてもいいですけどね」

苦く笑つて、あたしは職員室に向かつた。

職員室は生徒会室と実は一番離れている。
言えば学校の端と端にあって

行くのに5分はかかる。

この学園、無駄にでかいんだよな・・・

廊下にはあたしの上靴の音しか聞こえないものだから
不気味で時々キヨロキヨロしてしまつ。

暗いのはいつものことだけど

なぜか今日は寒気がしてならない。

「早くいかないと・・・」

スタスタと歩くものの

やはり寒気がする。

「もういや！」

あたしは猛ダッシュで廊下を走つた。

職員室ドアの前であたしは胸をなでおろした。

暗いのはなくなつたけど

寒氣はまだして、気持ち悪い。

気持ち悪いけど先輩を待たせてるから

職員室にツカツカと入つた。

「失礼します。書類、置いときます」

「はーい、」苦勞様です

英語担当の西戸先生が「コアを
おいしそうに飲みながら返事した。

「失礼しました。」

職員室ではあくまでも鈴架学園・生徒会会長・美原鈴羽なのだ。
眞面目を突き通すに限る。まあ、会長だし。

職員室を出ると、そこには先輩が
壁に背中を預けて立っていた。

「先輩？」

「迎えに来た。会長、いちいち往復するのもいやだろ？」

「いやまあ・・・はい。」

「俺だって面倒くさいってーの。ほら、帰るぞー」

「は、はい」

そつか、あの寒気、後ろに先輩がいたからだ
そう思つたとき、また寒気を感じた。

学校からあたしの家まではおおよそ15分程度の道のり。
まあまあ近いほうだとは思う。

「かいちょーなんか元気ないけど？」

「あ・・・えと、さつきから寒気がして・・・」

「寒気？」

先輩は後ろを振り向いたけど、誰もいなかつたようで
また前を向いた。

「廊下歩いてるときは、先輩が後ろにいるからかな・・・つて
思つたんですけど・・・」

「俺、かいちょーが行つた後外の渡り廊下からいつたから
それはないな」

「そなんですか・・・つてそこ通るの禁止ですよー！」

「あ、そういうばかいちょーって会長だもんね、ごめんごめん」

「・・・むちゅくちゅ馬鹿にされてるような気がするんですが?」

「うん、馬鹿にした。『ごめん』

「んもーつークシユンッ」

「何、寒い？」

「い、いえ・・・別に・・・クシユンッ」

「寒気つて、もしかして・・・」

「へ・・・?ふわ・・・わわ・・・」

「美原?！」

先輩の声とともに、あたしの意識は途切れ
ああ、あの寒気は風邪だつたんだな・・・と仄づいたのだった。

* 第6話 *

「ん・・・ふつ・・・」

「美原、大丈夫か？」

「・・・先・・・輩・・・」

先輩の声にうつすらと目をあける。
その目の前には先輩がいた。

「わつわつわ・・・」

あたしは急いで起き上がった。

おきていいきなりあの顔があつたら
誰だつてびっくりすると思つ・・・。

「ちょい、じつとしてろ」

そういうと先輩はあたしの頬に手を添えた。

「まだ熱あるな・・・熱い？寒い？」

「あ、えと、あ、や、う・・えと・・・
さむ、ささむいです・・・」

何だ。この言葉。

宇宙人か！あたしは！

「じゃあ、布団一枚追加してくるわ。」

「あ、いやいいです！大丈夫です！帰ります！」

あたしは急いで起き上がり

ベットから下りた。

と・・・そのとき、あたしは体の力が抜けてしまった。

「わ・・・」

「つと。まだ起きんな。ほら」

抱えられたまま、口に体温計をつっこまれ
あたしはなにもいえない状態になつた。

「ん・・・」

すぐに抜かれ先輩はあきれた顔で

「 38・5。こんなんで帰れるか。あほ」

「わかれいいんだよ、ほら、寝てろ」

先輩はあたしのあたまをかき回して
違う部屋に消えていった。

「・・・・・んー・・・・?」

あたしが田を覚ましたときには

部屋から物音もしなくて不気味だった。

ふと、手に体温を感じると思つてみると
あたしの手の上に先輩の手が重なつていて
先輩はベットに突つぶして寝ていた。

あたしはその寝顔に見とれてるわけで・・・

「先輩・・・・・かっこいい・・・・」

あたしは先輩の髪の撫ぜて

先輩の笑顔で癒されていた。

「ん・・・・美原・・・・?」

「わわつ！は、はい！」

「起きたか・・・・大丈夫か？」

「え、あ、はい！まだ少しだるいですけど大丈夫です」

「そつか、じゃあまだ横になつてる。」

「いや、でも・・・・」

「いいから。会長、毎日6時間田から8時過ぎまで

ぶつ通しでやつてたんだろ？

そりや、体も壊すつてーの

「・・・・すみません」

「まあ、これからは気をつけれこと。

今度からは俺がちょいちょい呼んでやるよ」

「い、いやでも・・・・」

「会長の事を考えての話。ほーら、横になつて

「・・・先輩どこで寝るんですか。」

「俺ソファーで寝るから大丈夫」

「風邪引きますよ」

「じゃあ、会長のベットにはいつてもいい?」

「／＼／＼／＼／＼な・・・?！」

「ま、かいちょーが寝付いた頃に欲があれば
はいりつかな。」

「なつ・・・」

「はいはい、とりあえずおやすみー」

布団をかけられ、半強制的に
あたしは横になつた。

* 第7話 *

あたしはこいつのまにか寝ていた。
だいぶ寝てたのにまだ寝れるとほ
おそむべし、自分・・・！

『おにいちゃん！あのね、今日ね！先生がね
お絵かき、上手だね、つてほめてくれたの！』
『おー、よかつたじやん！鈴は本当に絵が上手だもんなあ
『おにいちゃんもお絵かき上手だよ～？』
『鈴ほどじやないよー？』

あれ・・・なに?これ・・・

『おにいちゃんはね！鈴のおむじかとこなるの！』
『あらあら、普通は反対よ？鈴がお兄ちゃんのお嫁さんになるのよ
？』
『アーナの？』
『ええ、そうよ～。』
『じゃあー鈴、おにいちゃんお嫁さんになるー？』
『大きくなつたらな～。』
『うんー早く大きくなるつ』

・・・お母さん・・・?
お兄ちゃん・・・?
どうして？！なんでいるの？！
『それじゃ、少しでぐるな？鈴羽、いい子にまつててな？』
『うん！パパ待ってるーママもおにいちゃんもー。』

『「うんね？それじゃ一つでいいですか』

『おつやー、こいつれわ』

『...ニ一せしハリハリニ』

卷之三

『父の仕事』
が終り、お前たち

『ママ・ママ・パパ・パパ・？おにいちゃん・？

お出かけ
・
・
・
行かないの
・
・
・
・
?

٦٣١ رِجَالٌ

夢・・・?なんで「」んな夢・・・

鈴いい子にしてるからあー！帰ってきてええ・・・・

鈴

『鈴羽ちゃん』

卷之三

『ねえ、あの子。ここ最近引っ越ししてきた子なんだだけじゃ

『ええ、親御さんともども殺されて親戚の長井さんとのじりに引き取られて山口地方へ

引き取られたんですね

中 本業に・・・かわいそう・・・

『兄妹もなくされたんですね』

『かわいそうに・・・』

やめてよ・・・かわいそつとか言わないでよ・・・

『かわいそつに・・・』

『かわいそつに・・・』

やだ・・・やだよ・・・

- k a n a y a -

「やだ・・・よ・・・」

隣で寝ていると、不意に美原の声が聞こえた。

「ん・・・美原??」

「かわい・・・そつ・・・なんて・・・言わないで・・・」

美原、夢でもみてるのか・・・?

もしかして・・・

「お父さん・・・鈴・・・いい子にしてる・・・」

『家族の夢・・・か・・・

俺はどうもこうこうことは弱いらしい。

「俺・・・家族じゃねえけど・・・」

「お兄ちゃん・・・また・・・優しく・・・わら・・・つて・・・」

おれはいてもたつてもいられなくなり

家族でもなんでもないけど、返事をしてしまった。

「大丈夫、俺ここにいるから・・・鈴羽はいい子だよ」

俺がそういうと、美原はふわりと笑って
またリズムのいいかわいい寝息を立て
寝たのだった。

- k a n a y a -

* 第8話 *

目を開けると、茶色の柔らかそうな髪があった。
ボケー···とそれを見ていると
急激にあたしの思考路が動き始め
頬がピンク色に染め始める。

「あつ···あつ···あつ···あつ···！」

そう、目の前には先輩の髪の毛。

先輩は本当にあたしの隣で寝ていた。

寝息が静かすぎて全然気づかなかつた現状と

今ここにいる自分の立場に

もう頭の中がぐるぐるぐるぐる···

不意に先輩が寝返りを打ち、こちらをむいた。

そのかわいい寝顔にあたしの顔から

今にも湯気がでそうな勢い。

「···かわい···」

柔らかそうな髪の毛を触りたくて

手を伸ばすと、その手はつかまれ

驚いて先輩みると、ニヤリと笑いながら

「おはよ、鈴羽

と言つてきた。

「わー一つ！すみません、すみません！」

「いやいやいや、全然いいんだけど。あ、てかおはようって言われたら

返すのが正義じゃなかつたつけ？

「あ···」

これはあたしが決めた鈴架学園の···ルール？掟？まあそんな感じの事。

「おはよー、『Jギ』こます・・・・・

「はい、おはよー」

「今度は一回りと柔らかく笑う。

二人とも起き上がり、伸びをする。

先輩は笑つたままだつた。

なんか・・・するいな、その笑顔

「いいな・・・その笑顔・・・・

「なにが？」

「・・・あたし、目つき悪いしあんまり笑えないから」

「そう？」

「・・・はい」

「まあ・・・確かに。目つき悪いとかじゃなくて寂しそうに笑うことが大体つて感じかな」

「・・・それ、田つき悪いからですよ」

「いいや、違うな。」

「そうですつて！」

「俺の目に一言はない」

「なつ・・・・

「ほら、笑つてみろ」

頬を引つ張られ、あたしは先輩の方を抑えて

「いしゃい！（痛い！）」

と叫びまくつた。

放してくれたけど、頬がジンジンする・・・

すると、先輩があたしの頬を撫ぜて

「大丈夫、鈴羽もきっと本気で笑えるよ」

その先輩の優しい目色にすきこまれそつだつた。

「・・・あれ！？今何時！？」

あたしは吸い込まれそうなのをとめて

今おかれてる現状に頭を戻した。

「いま8時」

「え？！学校、いかなきやーやはいいいいつ」

急いでベットを下りた瞬間

また体の力が抜けた。

「わ・・・」

間一髪、先輩に受け止められた。

あれ・・・まだ風邪引いたままなの・・・？」

「会長、この一週間、何時間仕事した？」

「え・・・えと・・・2・4・6・8・10・・・12時間ちょい

ぐらい・・・？」

「・・・そりゃ体の力も抜けるわ。」

「へ！？なにが？！」

「もしかして、徹夜で勉強したりした？」

「ウン、毎日。」

「・・・会計の仕事は何時間ぐらいいした？」

「えつと・・・6時間ぐらい」

「仕事と別ですか？」

「うん」

「・・・はあ・・・ダメだこいつ。アホだ」

「は！？なんでそうなるの！？」

「ま。とりあえず今日は休みな」

「へ！？いや、でも、別に学校ぐらいいけるし・・・」

「無理。そのフラフラさせでいけるとでも思つのか？」

なら会長の頭は穴が開きまくりだな。」

「な・・・・・」

確かに先輩の言つ「とは正論だ。

だけど、正論過ぎてむかつく・・・

「休むにしても、とりあえず家に帰らないと・・・ですね」

「別にここにいとけばいいじゃん」

「へ！？なんで！？」

「いや、なんでもない。」
「ベットもあるし、俺、面倒見れるし」

「いや先輩は学校に・・・・・」

「別に俺学校すきぢやないよ。こつてもいかなくともいい

「・・・・・。そんなの、悪いです」

「じゃあ、俺が自ら面倒見たいって言つたら?」

「・・・・・あたし知りませんよ」

あたしはまたベットにもぐつた。

もぐつてゐるからだと思ひけど、少しひぐもつた声で

「ありがとう」それこまますー

となぜかお礼を言われたのだった。

* 第9話 *

ベットにもぐったものの
息苦しい。

とはいっても外には出たくないし・・・。

寝ればいいんだけど、朝の光を見ると寝れないんだよね・・・

「会長、朝飯なにがいい?」

「・・・いらないです」

「食欲ない?」

いや・・・そういうことじゃなくて・・・

「そんなところまで迷惑・・・かけたくないです」

「別に迷惑じゃないよ」

「・・・絶対迷惑ですよ・・・」

「んー・・・じゃあ、朝飯作つて?それならいいだろ?」

「・・・わかりました。」

あたしはベットから這い出てきて

ゆっくりベットから起きた。

「なに、作ればいいですか?」

「んー、なんでもいいよ。会長がつくりたものならなんでも
「じゃあ・・・」

あたしはキッチンに行き、あるものを確認する。

(会長は家庭科5のA)

パンとハムとチーズと野菜もろもろと・・・(略)

まあ、パンハムチーズ卵があるならサンドイッチかな。

パンをナイフを取り出し半分に切る。

パンの耳を取つて、次に卵を・・・

「かいちょー手際いいね?」

「? !

後ろを向くと、先輩が二コ二コしながら見ていた。

見ていた・・・というか見下ろしながら・・・（鈴羽155ciii・

哉也178ciii）

「かいちょーちっぢゅいねー」

あたしの頭をぽんぽんとたたきながら

「人形みたいー」とこれまた二コ二コしながら言った。

「どーせちびですよ・・・」

「いやいや、可愛いから大丈夫」

そうこうと腕を回してきた。

「なつ・・・え、えと・・・あの・・・」

「少しだけこいつさせてくれない？」

その先輩の声は少し寂しそうだった。

「先輩・・・？」

「名前で呼んで」

「いやいやいやー・」

「だめ?」

「・・・・哉也・・・先輩?」

「ん・・・」

先輩はなにかを思い出すように、笑い

「おいしいの待ってるよ」と言ひ残し

リビングに戻ったのだった。

「できましたよー?ってあれ、先・・・哉也先輩?」
お皿をもつてリビングに行くと、先輩は見当たらず。
背もたれ越しにソファーをのぞくと
そこには先輩がソファー突つぶして、スヤスヤと寝息を立てて寝ていた。

「看病、してくれたの、かな」

先輩寝てないんだな・・・

あたしはお皿を机に置いて、先輩に近寄った。

「・・・やつぱり可愛い・・・」

口角があがりつぱなしないことに気がつき

即座におろす。

あぶないあぶない・・・。

「哉也先輩ー？朝ごはんできましたよー？」

一応呼んでみるもの、まあ案の定反応なし。

まあ仕方ないよね、うん。

先輩を起こさず、お皿をまたキッチンにもつていく。

先輩食べてないのに自分は食べるとかなんか微妙だから二つをラップして冷蔵庫入り。

「先輩、床いたそう・・・」

そう思つて、よつこいらしょつと、ソファーにあげる。

あれ・・・むっちゃ軽い・・・

つて、なにを考えてんだ。あたしは。

さて・・・先輩寝てるから

勉強でもしようかな・・・

そう思い、先輩にタオルケットをかけて
英語の勉強に取り掛かった。

* 第10話 *

「えっと・・・」の英語の訳は・・・
とてつもなく英語が苦手なあたしは
だいぶ苦戦中。

基礎は普通なんだけど、入り組んでくると
こう・・・なんていうか、全部が全部記号に見えてくる・・・
後、リーリングのは得意だけどリスニングがとてつもなく苦手だ。
「もう・・・外国なんていかないんだから
英語なんていらないよー・・・」

そんな嘆きを言つていると

インター ホンがなった。

「出でいいの・・・かな?」

一応玄関まで行き、外を覗く。（先輩の家はマンショんらしい）
と・・・多分先輩の友達か・・・彼女であろう人が立っていた。
「さすがに先輩起こさないとね、うん」

「ちょっと待つてください」と少し声を落として言い
サササとリビングに戻り、先輩を起こす。

「哉也先輩、お密さんですよ！」

先輩は「ん・・・誰・・・?」と言ひ
うつすらと目を明ける。

「えっと、先輩のお友達か彼女さんか知らないけど
とりあえず、いますよ」

「・・・小泉か・・・だりい。鈴羽出て」

「い、いやですよ。」

「つ・・・たく、面倒くさい・・・。」

「いいから、出でください。あたしはおとなしく待つときます」

「・・・しゃあね」

先輩は渋々玄関に向かい、ドアを開ける音がした。
ちょっと気になつたが、おとなしく待つとく約束だ。
英語はもう嫌だから、数学でもしようかな・・・
英語のセットを型付け数学の教科書とノートを出す。
数学は公式とかに当てはめるのがほとんどだから
とても楽しい。そういう勉強はかなり好き。

1問目をといてるとき、先輩が戻ってきて
小声で「鈴羽、ベットに寝て！」と言つてきた。
意味不明だつたが、かなり急いでる様子だから
ベットにもぐりこんだ。

すると耳元で「少しだけ待つて」と言い
耳に何かをつけられたと思うと音楽が流れ始めた。
・・・イヤホンね。会話、聞かれたくないんだ。
そりやそうだ。後輩が聞くような内容じやないかもしねいし
もしかすると、小泉つて人は彼女かもしねい。
あたしは大人なしく音楽を聴いて、待つていた。

* 第1-1話 *

おとなしく待ってる……といつても
人間っていうのは欲がある。

・・・会話が気になってしまつ・・・。

悪いとは思った。だめだとは思った。

けれど、小泉つて人が彼女ならなおさら聞きたいと思つてしまつ。
イヤホンを少しだけずらして会話を聞いた。

「で、あの子誰なの？」

「あの子つてどの子。」

「インターほんに出た子。そこへ寝てる子だと悪いな？」
「会長だよ。生徒会室に用あつたから行つたら、
しんどそうにしてたからつれてきたんだよ」

「そんなんの保健室にでも運べばいいんじゃない？」

「保健の先生は残念ながらもう帰つてたよ。8時とかだし」

「なんでそんな時間に生徒会室にいるのよ！」

「別になんだつていいだろ？！俺の勝手じゃねえか！」

「あたしって言う彼女がいながら、なんなのよー！またぐー！
この、遊び人！最低ね！！」

「はあ？俺とお前はもう別れたんだ。そういうだろー。」

「あたし別にあんたと別れたつもりないしー！とか

あたしと付き合つてないつて言つなら誰と付き合つてんのよー！」

「お前に言つ義理なんてねえよー！」

「どうせ、せづ、その会長とイチャイチャしてるんでしょー。」

「・・・はあ？んなわけないじゃん。」

「じゃあ遊び人？」

「・・・まあな」

「あつそつ、じゃあ、あたしともまた付き合いなさいよ」

「お前に興味とかねえし」

「やつぱり会長は本気なの?」

「・・・わあつた。付き合つてやる。だから、今日は帰れ。」

「ありがと、今日の課題置いとくわね? 後、メアド送つてね。変えたでしょ?」

「・・・わかつた。わかつたからまじで帰つて。」

「じゃ、明日一緒に登校しましょうね?」

玄関のドアが閉まる音がして。

先輩が近づいてくる音がした。

あたしは即座にイヤホンをつけた。

「鈴羽、もう、いいよ」

先輩はあたしのイヤホンを外して、話しかけた。

「哉・・・先輩。あたし、帰りますね。」

「は?いや、帰れないだろ・・・」

「大丈夫です。帰ります。朝ごはん、冷蔵庫に入れてありますから。

失礼・・・しますっ・・・」

あたしは鞄を取つて、先輩の家を出た。

『どうせ、その会長とイチャイチャしてるんでしょ?』

『はあ?んなわけないじゃん。』

『じゃあ遊び人?』

『・・・まあな。』

・・・遊び・・・人・・・・

あたしは後悔した。

欲でイヤホンをはずすんじゃなかつた。

外さなかつたら、あんな会話聞かなくてすんだのに・・・

というか・・・あたし、全然動搖かくせてないじゃない・・・

・・・あたしが・・・先輩の事、本氣で好きって・・・
ばれちゃうじゃないの・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933z/>

会長は・・・

2011年12月29日19時47分発行